日本茜生産部会だより

2016年　8月
第1号
発刊　　不定期
発行元　美し山の草木舎

アカネふやせふやせ大作戦

アカネの挿し方、管理方法のポイント

○目標は揃った株を量産することにあるので９㎝ポットに一節か二節で切った茎を２～３本、節の部分が土に埋まる程度、又葉も２枚程度残し挿す。
ただ茎は折れやすく、逆刺（小さなとげ）があるのでとても挿しにくい。挿す時、前に挿した茎が、手や服にひっかかる。
○挿してからは日陰に置き、水をきらさないようにする。
○新しい芽が動き出したら、プランターか大きいポットに植え替えて日よけをする。
○今年はその状態で管理するのが楽で（草引き、水やりｅｔｃ）来春芽が出だした頃（冬は地上部は全部かれるので）畑か収穫コンテナに植えて大きくする。収穫のことを考えるとコンテナなどに植えるのがのぞましい。土は腐葉土がたくさん入ったやわらかい土にし、排水のよい状態にするとよい
○自然に育っている条件は根元は日陰で、茎がのびると草木の上を這い、日当たりを好んで成長する。　　ｂｙ　永井園芸

日本茜苗頒布学習会終わる

7月17日参加者60名
日本茜学習会と苗の頒布会を行いました。参加者の内、25名が日本茜生産者として協力すると名乗りをあげてくれました。ここに、はじめて日本茜生産部会準備会が立ち上がったわけです。みなさまのところでお分けした苗は順調に育っておりますでしょうか？今年度は根を大きくするよりできるだけ、一株から苗をふやしていただきたいです。

和泉茜の杉本一郎さんを訪問　7月29日

草木舎のＦＢの茜の回に超イイネをしてくれたご縁で岸和田の近く泉州ど真ん中の忠岡町にお住まいの杉本さんをお訪ねしました。
杉本さんは6年前滋賀県守山市で偶然に日本茜を発見され、数株を持ち帰りました。それをどんどん増やして今は写真のとおり、収穫コンテナで１５０箱以上栽培されてます。
場所は大阪から和歌山に通じる紀州街道に面した住宅地、とても栽培条件に適しているとは思えません。ここでこれほどできるなら、自生地である私たちのところでもきっとできるはず。
杉本さんの年間の試行錯誤をお聞きしました。
○苗はどうして増やすの？種から増やすには芽は出るが弱々しく多くを期待できないので、主に挿し芽でふやす。一節ずつ切り、葉をある程度ちぎり縦に挿し芽をするその培養土はお店で購入する。日本茜栽培は収穫コンテナの側面にビニールを張り根が逃げないようにして植えておられました。肥料には油粕をつかっておられました。質問「すでに根のあるものを横向きにして土をかけて苗を増やす方法はどうですか？」

答えはダメ。もう根があるので必死に根をだそうと植物が努力しない。
う一ん、増やしてるのか枯らしてるのか分からない状況で、私なりに考えついた名案だと思っていたのですが。
コンテナを半分土に埋める方法もためしたが、あまり変わりはなかった。

〇茜でどんなものを染色？

泉州は昔から綿紡が盛んで毛布やタオルや綿布やニットの地域、杉本さんがこだわるのは木綿(絹も毛糸も染めますが)。色々試みて分かったことは、木綿は赤を吸着し、絹などのタンパク系の布は赤も黄色も吸着してしまうこと。(絹や毛は１液目では染めない方が良い。→黄、橙に染まる/緋色にはならない)

だから木綿は黄色を吸着しないので重ね染めをしていったら緋色になる。(うーん、なるほど日の丸・・・・)

「えっ呉汁処理とかしないんですか？」と質問すると「まったくしません」！！！！

同じ染液で何回も染めて実験してみると９回目に酢を入れたら白が突然赤くそまりだしたことも。数回（２～３）で染液を捨てるのはもったいない！と。化学実験のようなサンプルデータはまさに宝物。

住宅地に 150 箱

機織りの道具のお部屋で今までの労作をいろいろ見せてもらいました。

美しい風合いの毛糸の作品は糸を染めてタバコ屋にもっていくとタバコ屋のおっちゃんが編んでくれるのだそうな。だんじりのガラを染め抜いた手ぬぐい、帆布やジーンズに使う綾織綿物の柔らかいピンク

杉本さんは川島織物を自主退職した後、染めと織の研究をはじめられたとか。こだわりぬく職人さんのような探求心、地域の繊維業の歴史と絡めるダイナミックな発想はさすがだとおもいました。夏に生まれるお孫さんの毛布を茜で染めて、自分で織ってつくる親心も素敵でした。

奥様の晴子さんの「長年サラリーマンでやってきて自分の好きな事やらせてあげたい」の一言にはぐっときました。この人の笑顔と支えがあってこそ。

とにかくその研究と蓄積はものすごい、芸術家の染めでも、職人の染めでもない、地域で「業」を起こす人の染めにめぐりあえた気がしました。

杉本さんはホームページもフェイスブックもやっておられます。是非覗いてみてください。（和泉茜の里で検索）

Afa の真砂三千代さん　美山で茜染め　８月４日５日

９月の北京のショーで使われるスカーフを草木舎で染めました。生地はパイナップルの繊維だそうです。

煮炊きにはひっくり返したＵ字溝が大活躍。（美山では鮎も焼き肉もＵ字溝）なかなかきれいな色に染まらず、ハラハラしましたが、2 回目、3 回目の煮だしでうまくそまりました。

色々な課題も明らかになりました。

茜を同じように染めるのは気まぐれでむずかしい、たとえば季節によって染まり具合が違うのとか？

貴重な茜を最少で効率よく染める方法の確立、これは商業的に茜染めを扱うなら不可欠。

豊富な茜でこれらの実験をしたことのある人は極めて少ない、などなど・・・・課題だらけですね。

皆さんの投稿お待ちしています。